若き友へ

１９９３年１０月１４日

経済学部教授 高島 均

所感９３－０３　豊かさの尺度とＧＮＰ幻想

「より豊かに」というスローガンは、何時如何なる社会にも妥当する目的であろう。断定的に「である」と書かなかったのは、実は、「本当にそういえるのか？」という一抹の疑念を持っているからであるが、ここでは、その事には触れない。勿論、「豊かさ」という時、物的な豊かさと同時に精神的な豊かさも含んでおり、如何に物的に豊かであったとしても、そこに暮らす人々の精神が貧しければ、その社会は豊かであるとはいえまい。しかし、ここでは、物的な豊かさ－社会を経済面から捉えた時の豊かさに限って話を進めよう。

社会の経済的豊かさを示す指標として、通常用いられているものは、国内総生産ＧＤＰとその成長率である。より厳密には、一人当たりの国内総生産、或いは、一人当たりの実質国内総生産とその成長率である。小論の本筋にとって、国内総生産ＧＤＰでも国民総生産ＧＮＰでも差し支え無いので、以下では、よりなじみのあるＧＮＰという用語を用いる事にする。此等の指標の大きさを過去と較べたり、他国と較べたりして、日本社会が豊かになった（豊かである）とか、まだＡ国ほど豊かでないとか、Ｂ国よりは豊かであるとか語られたり、此等の指標の成長率が高い程望ましいと考えられている、という事に異議を唱える人はいないだろう。

ところで、ＧＮＰが豊かさの尺度として欠陥を持っており、従って、一人当たりで考えようが実質値で考えようが、此等の指標、或いは、その成長率が、豊かさの尺度として欠陥を持っている事は、マクロ経済学の教科書に屡々記されている所である。第１に、ＧＮＰは、市場経済の中で取引された財・サービスしか取り挙げていない。第２に、ＧＮＰは、公害に見られるような産業活動に伴う外部不経済を斟酌していない。

第１の点が問題であるのは、次の２つの架空の社会ＡとＢを較べる事によって明らかである。ＡとＢの２つの社会は、誰が家事サービスを行うかという点を除くと、そこで提供されている財・サービスの種類と量、或いは、社会が保有している資産の種類と量は全く同じであるとする。社会Ａでは、全ての妻が、専業主婦として自己の家庭の家事サービスを行っており、社会Ｂでは、全ての妻が、家政婦として他家の家事サービスを行っているとしよう。社会Ｂでは、家事サービスは市場経済の中で行われているので、それに伴い、賃金の支払いと受取が発生しているが、社会Ａでは、家事サービスは市場経済の外で行われているので、それに伴う賃金の支払いと受取は発生していない。従って、社会ＢのＧＮＰは社会ＡのＧＮＰよりも大きく、ＧＮＰ、或いは、それを基礎にした指標で見ると、社会Ｂのほうが豊かに見える。しかし、この２つの社会の豊かさに差異があると主張する者は一人もいないであろう。家事や育児サービスに限らず、伝統的な社会においては、家庭や地域共同体の中で行わ

れていたサービスが、市場メカニズムの中で行われるようになると、実質的には何らの経済的進歩が無かったとしても、数字の上からは、豊かになってきた、経済的に向上してきた、という風に見えるのである。

第２の負の外部効果の問題は、取り立てて説明するまでも無いであろう。産業廃棄物による環境の悪化は、それだけ経済社会の豊かさを劣悪化するが、ＧＮＰには、この点に関する斟酌がされていない。従って、ＧＮＰ、或いは、それを基礎とした指標は、この負の外部効果の分だけ実際の豊かさを過大評価している。

随分以前から、国連を中心として経済学者達が、経済的豊かさを表す指標としてのＧＮＰが持っている此等の欠陥をカバーする、新しい指標の作成に努力してきた。もっとも、曾て、ＮＮＷ（Net National Welfare）という指標が作られたが、一般化する程の合意は得られなかった。しかし、ＮＮＷに類するような指標が出来たとしても、問題は解決されていない。というのは、ＧＮＰにしろ検討中の新しい指標にしろ、そこに見逃されている、より本質的な問題を含んでいるからである。

見逃されている第１の点は、ＧＮＰの成長をもたらしてきた科学技術の進歩が、地球や生態の壊滅的環境破壊と不可避的に結びついている事である。この事は、先に述べた豊かさの尺度としてＧＮＰが不適切である第２の欠陥と関連している点であるが、ここで改めて取り出したのは、科学技術の進歩を利用した物的豊かさの負の側面が、金銭的評価を超えるものであるからである。

　例えば、自動車の発明とその商業化・大衆化は、人々に多大な便宜をもたらしたと同時に、自動車関連産業を含めて、ＧＮＰの上昇に大きな役割を果たした。この点は、現在の不況からの脱出を、自動車産業の不況が大きく足を引っ張っている事からも理解出来よう。しかし、この自動車産業の発展は、同時に、自動車の走行がもたらす騒音・排気ガスによる生活環境の悪化は勿論の事、毎年、一つの戦争による死傷者を上回る程の自動車事故による被害を引き起こしている。この甚大な人的被害を、一体何の様にして金銭評価し得るだろうか。更に、自動車の普及は、道路整備の名の下に、多くの道路の舗装化をもたらした。この結果、雨水はほとんど地下に浸透出来ず、地下水脈の枯渇とそれに伴う地盤低下、又、先の台風１１号の際に見られたように、ほとんどの道路が舗装された都市部において、降り注ぐ大雨は道路を河のように流れ、毎回のように都市洪水を引き起こしている。暑さ寒さを防ぐ筈のエア・コンは、その排気による大気温の上昇をもたらし、益々もってエア・コン無しでは済まされない環境変化を引き起こしている。この為、エア・コンは益々普及し、ＧＮＰは益々上昇し、それとともにエネルギーの大量消費による地球環境の絶望的な悪化と地球の死を早めている。建物の内と外との大きな気温差は、冷房病といった新しい病気をもたらし、人間を苦しめている。原子核物理の発達は、地球そのものを何度も吹き飛ばす程の核エネルギーの保有をもたらし、その平和利用の掛け声はあるものの、その管理の為には、人間の通常の神経による制御を超える大きなシステム管理を必要として来ている。不慮の事故が引き起こされる確率が例え限り無くゼロに近いとしても、それが起きた時の被害は測り知れ無い。ゼロ×無限大の答えは定義出来無い。況や、不慮の事故が起きる確率は、限り無くゼロに近づけ得たとしてもゼロでは無い。悪意の者による略奪を防ぐ為に、人間生活は、徹底的に管理されるようになる。科学技術の進歩がもたらすＧＮＰの増加に隠された負の側面、或いは、潜在的なその大きさは、金銭評価を超えており、ＧＮＰの大きさに惑わされていては、何時しか人類の破滅に至らざるを得ない。

第２の問題点は、ＧＮＰにしろ、或いは、現在模索されている新しい指標にせよ、それによって計測されるものは、新しく産み出された富であって、新しいものが産み出された為に失われたもの及びその価値が見落とされている、という点である。資本主義による経済社会の決定ルールは、円の投票による多数決原理である。個人が保有する円の投票券の分布が既存の所得と資産の分配によって決定されている、という事に潜む問題点を無視したとしても、このルールは、二つの大きな問題を孕んでいる。一つは、選択対象となるものが“存在しているもの”に限られていて、“失われたもの”は選択出来無い、という点である。二つには、多数決原理による決定が、少数意見を持つ人間の選択の自由を踏みにじる、という点である。最近、新聞紙上で、「発明は必要の母」という言葉を見たが、この言葉は、今日我々が置かれている状況を雄弁に物語っている。

国土の基盤整備とか社会資本の形成というと、新幹線や高速道路の建設が必ず出て来る。高速道路の建設が持っている問題点は、ここでは説明を省く事にして、新幹線の問題を考えてみよう。新幹線の整備により、短時間で遠くまで到達出来るようになった。旧国鉄において、ほとんどの路線が赤字であったが、新幹線部門は黒字であった。しかし、この事をもって、人々が新幹線による高速鉄道サービスを望んでいる、と結論するのはあまりにも短絡的である。新幹線よりは時間が掛かるが肉体的苦痛をさほど伴わない在来線特急、或いは、早朝に丁度目的地に到着する在来の遠距離夜行列車、此等を利用したいと願っても、新幹線の登場により、此等の在来線サービスは廃止されてしまい、利用出来無い。人々は、自ら望まぬ新幹線を利用するか、それが嫌ならば、直ぐに終点となる中距離電車を乗り継いで、しかも、その連絡が非常に悪いので、乗り継ぎ駅で何時間も待たされる、という禁止的な程高いコストを払わなければならない。もしも、多くの人々が、止むを得ず新幹線を利用しているのだとしたならば、新幹線サービスの登場とそれに伴うＧＮＰの増加は、経済的豊かさどころか、経済的貧困の証拠以外の何物でも無い。次から次へとモデル・チェンジされる様々なユニット家具をはじめとした製品。此等の部品の製造期間は短く、次のユニットを買い足そうと思った時には、既に製造・販売が中止されている。結局、今まで購入したものを全て捨てて、新しく一から買い揃えるか、それが嫌ならば不揃いの家具に囲まれて生活するしか無い。モデル・チェンジされた新しい製品の生産・販売により、ＧＮＰは上昇し続ける。そこには、本来の消費者主権－消費者が望むものを購入出来る権利－は存在し無い。

古くからのタイプのものしか生産されていない社会を考えよう。この社会で生産しなければならない量は、新規の需要と破損部品の取替需要だけである。短期間で既存製品を生産中止にし、未だ使えるものを強制的に廃棄させ、消費者に新製品を購入させる社会よりも、この社会のＧＮＰは明らかに小さい。だからといって、この社会は、後者の社会よりも経済的に貧しいと言えるだろうか。

私見によれば、豊かさとは、どれだけの種類と量の財・サービスが選択可能か、という選択肢の多様性によって測られるものである。過去において選択可能であったものが選択出来無くなったとしたならば、それは経済的な貧困化を意味する。過去に存在しなかったものが利用出来るようになった事（プラス）と過去に利用出来たものが利用出来無くなった事（マイナス）の二つを測らなければ、真の意味での豊かさの計測は出来無い。プラスを何の程度に評価し、マイナスを何の程度に評価するのか。

　異時点間の経済的豊かさの指標の一つである実質所得の定義について、講義で二通りのものを紹介した。第一は、見かけ上の実質所得という概念を使ったものである。これによれ

ば、過去に選択した財集合を今期購入したとしても未だ所得に余りがあるとすれば、この間で実質所得は増加した、と言える。しかし、「発明は必要の母」という言葉に象徴されるように、古いものに替えて新しいものを消費する事が強制される。こうした社会には、過去において選択可能であったものが、現在では選択不能であり、見かけ上の実質所得という概念を用いて、実質所得が上昇しているか否かを確かめる事は出来無い。過去に選択する事が出来たものを、誰一人として選択するものがいなくなるまで、その財・サービスが供給されるので無い限り、例え、新たな製品・サービスが次々と現れ、ＧＮＰが上昇したとしても、経済的に豊かになったという風には、私は思わない。

第二の定義は、消費可能な財集合がもたらす効用水準によるものである。これによれば、新しい消費集合がもたらす効用水準が、古い消費集合がもたらす効用水準よりも大きければ、実質所得は上昇した、という事になる。効用というものは主観的なもので、個人間の効用を比較するルールは存在し無い。比較不能な個人間の効用を、円の投票による多数決原理で処理しようとする時、そこには、少数者の選択が無視された事を正当化する何等の根拠も存在し無い。多数であろうと少数であろうと、一部のグループが他のグループの利益を踏みにじる時、そこには、それが社会の公正と正義に照らして正当性を持つという、道義的・倫理的根拠を必要とするのである。

見逃されている第３の点は、経済的活動に付随して生じる精神的豊かさの問題である。これは、親子や兄弟姉妹間の愛情・目上に対する尊敬・他者に対する思いやりといった、純粋に精神的活動による豊かさとは異質なもので、働く喜びや集団における自己認識といった、経済活動抜きには存在し得無い精神的豊かさの問題である。経済学が、生きた人間の経済活動を対象とする学問である以上、こうした人間の経済活動に伴って派生する精神的豊かさをも対象とする事は、授業においても触れた事である。従って、社会の経済的豊かさは、斯かる経済的活動から派生する精神的豊かさも含んで定義されるものである。家庭で焼いたパンやケーキを食べる事には、自己の食欲を満足させるだけではなく、それを自ら創り出し、完成させたという喜びがある。幼い子供は、自分の親が手ずから作ってくれたという喜びに加え、パン種を捏ねたり、餃子の皮を水で張りつけたりといったたわいも無い事を親と共に行う事により、ものを創り出す喜びを共有し、更に、喜びを共有する事の喜びを体得し、家庭の一体感を強めるだけではなく、人間として成長していくのである。何時も何時も出来合いの総菜を買ってきて食事をすれば、手間をかけずに食欲を充たす事は出来るが、それは、単に生命を維持する為の一つの機械的な動作、ロボットにオイルを注すのと何等相違も無く、食事という基本的な人間行動がもたらすべき精神の豊かさは皆無である。

人々が、単により多くの所得を稼ぐ事のみを目的として生活していけば、外見的には豊かに見えるかも知れないが、その社会における経済活動には、労働の苦痛という、経済活動がもたらす負の精神性は存在するが、プラスの精神性は全く無い。自動車産業の発展とそれに伴う道路の整備は、本来、人と人が出逢い、情報を交換し、交流を図り、又、路傍に息づく小さな草や訪れる虫達から受け取った精神の慰めを喪失させた。少し話が逸れるが、曾て６０年代末に、新宿西口の地下は、「地下広場」と命名されており、毎週末、多くの若者がギターを抱えて集まり、反戦フォーク集会を開き、帰宅途中のサラリーマンやＯＬも加わって、毎回、数千人から１万人に近い人々からなる交流の場であった。しかし、警視庁のよこやりにより、「地下広場」のプレートは「地下通路」という味気ないプレートに付け替えられ、これを拠り所として、「地下広場」は、ジュラルミンの盾を持ち重武装した機動隊員（国内治安軍の別名）により制圧された。広場に集まる人々は、少しでも立ち止まったり、２～３人集まったりすると、直ぐにジュラルミンの盾で小突かれ、蹴飛ばされ、「ここは通

路である。歩行者の邪魔になるからさっさと歩け」という威圧的な声の下に無理やり追い出された。何時しか、何千人もの人々によって時代に声を上げ、精神の共有を求めたフォーク集会は、踏み潰されて消え去った。新宿西口「地下広場」がもたらした、一つの時代を表す社会文化は、新宿西口「地下通路」への改称と共に窒息したのである。この逸話の中に、「広場」「道」といったものが、単なる「通路」以上のものを持っている事が、よく読み取れるであろう。エア・コンの普及は、吹く風から季節を感じ取る豊かな情操を喪失させた。科学技術の進歩と結びついたＧＮＰの成長といった経済神話の中で、失われるものは余りにも大きい。

　最後にＧＮＰの成長神話は、純粋に人間の精神的世界に属する領域にも、その魔力を及ぼしている事を指摘しよう。ＧＮＰの成長を社会の経済的成長と取り違えた現代日本社会は、ＧＮＰ成長の為に、次々と、製品の本来的性能と無縁なモデル・チェンジを行ってきた。こうした社会においては、ものを大事にするという事は不要な精神である。何故ならば、ものを大事に使い、壊れた部分を交換しようと思っても、その時には必要な部品が手に入らないのであるから、ものを大事にしても仕方が無いのである。ものを大事にしない社会が、いずれ、生きるもの、延いては、人間さえも大事にしなくなるのは目に見えている。豊かな精神性を伴った経済活動の下に、ＧＮＰで見れば貧しい発展途上国、或いは、発展途上にすら辿り着いていない社会に較べて、今日の日本社会の方が豊かであると信ずべき根拠は何一つ無いのである。石油ショックの際、省エネルギー・省資源という言葉が世間を賑わせたが、日本社会の不況からの立ち直りと共に、此等の言葉は忘れ去られた。今日、長い不況の中で、統計数字としてのＧＮＰ、或いは、その成長率に過ぎない経済成長率の呪縛から逃れ、本来の豊かさの意味をどれだけ肝に銘じるかに、日本社会の未来が懸かっていると思われる。自らの社会が依って立つ文化基盤を批判的に捉え直さずして、地球の未来は無い。